

「新しい東北」官民連携推進協議会
令和５年度 福島県意見交換会（第２回）議事概要（公開用）

令和５年９月１１日
「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

【日 時】令和５年９月１１日（月）１３：００～１５：００

【場 所】復興庁福島復興局／オンライン（Teams）

【出席者】（敬称略）

＜副代表団体＞（所属の五十音順）

株式会社Ｊヴィレッジ／株式会社東邦銀行／福島県／国立大学法人福島大学／一般社団法人ふくしま連携復興センター

＜復興庁＞

復興庁 復興知見班／復興庁 産業復興総括班／復興庁 福島復興局

＜事務局＞

株式会社ＪＴＢ総合研究所／株式会社ＪＴＢ

【議事概要】

１ 開会

復興庁より新規着任の挨拶をするとともに、今年度の取組の企画に当たって、委員の皆様から忌憚らない意見をいただきたい旨、挨拶した。

２ 各団体の活動紹介

復興庁、東邦銀行、一般社団法人ふくしま連携復興センターより、取組紹介資料（資料 2-1～資料 4-1）を基に取組を紹介した。

３ 令和５年度の取組方針、取組内容等について

資料１をもとに事務局より説明した。

（１）運営委員会での議論状況の共有・意見交換

これまで２回開催された運営委員会での議論の内容や実践の場の企画案に対し、副代表団体より様々な意見・質問等が挙げられた。今回挙げられた意見も踏まえ、運営委員会においてさらに企画案のブラッシュアップを図っていく。

（主な意見）

- ・ 学生同士の意見交換で若い方に被災地に目を向けていただくということは今後の震災の記憶、あるいは地域を作っていくための意見として極めて大事なのではないかなと思う。こういった取組を広げていけばいいのではないかなと思っている。
- ・ 行ってから自分たちで行動をして、出会いたい人にいろいろな話を聞くということは非常に良いと思う。
- ・ １日目の宿泊場所について、２月の川内村は、浜通りから行こうとすると雪などがあってちょっと

移動が難しいのではないかと思います。行程についてはまた運営委員会側の意見もあるので、意見交換会での意見を伝えていきたい。

- ・ 一日目のトークフォークダンスなど、みんなの交流館ならば CANvas を使って議論するということがあるのではないかと。
- ・ 1 日目の最初で、浜通りに戻れない方のふるさと愛について伺う場合には、ふるさと愛というテーマを純粋に話してくれる方から、「やっぱりコミュニティがあってよかったんだ」とか、「こんなことをやっていた地域だったんだよ」というような話が聞ける方だとよいのではないかと。
- ・ A グループの「戻れない方・戻った方の両方に聞く」という発想は、学生としては素朴な発想で「両方聞いたらいいな」と思ったというところと、福島大の学生は普段から復興住宅の方と接しているのであまり難しさを感じておらず、楽しくおしゃべりできるだろうという予感を持っているということだった。そういう方を選んでやれば、戻らない方との話も実現はできるかなと思っている。ただ B グループの「富岡で Welcome 体験、ワイン畑でのボランティア」をしてからやるというのも魅力的だと思う。限られた時間にどのような要素を盛り込んでいくかが難しい。ふるさと TFD を実際にやってみて、そこでたまたま出会った人のところへ 2 日目に行くというアイデアが A グループで出ていたが、似たようなアイデアが B か C でも出ていたと思う。それはふるさと TFD の使い方としていいなと思いつつ、どういう方をお招きしてダンスをするのか、次の日に訪問するプログラムを上手く組めるのかなど、オペレーションの難しさはある。何かそれに近い形で、ふるさと TFD と次の日のフィールドワークを上手く組み合わせるような形にできるといいと思った。
- ・ 2 回の運営委員会を経て企画がブラッシュアップされてきたと思う。今後も定期的に委員会が開催されるということなので、よりブラッシュアップされて素敵な事業になればいいなと思っている。合わせたい方によって大きく内容や捉え方が変わってくるものと認識している。学生の皆さんがどんな方を希望されるのかを踏まえて、連携している事業者などを挙げていきたい。
- ・ 「ふるさと愛」という言葉について、「ふるさと愛」は「郷土愛」とは違うみたいな議論になった。郷土愛と違うとしたら、いわゆるシビックプライド、地域に愛着を持ちながら主体的に地域の変革やより魅力をアップさせるための取組を自分たちで行うという、自分たちが主体的に行動するところが違う。そういうシビックプライドを持ってもらって、地域の人たちのシビックプライドも高め、関係人口になる学生たちも何かの行動をその後も無理のない範囲で取り続けることができるみたいな企画にできたらいいのだろうなと概念的には思うが、では具体的にどうするかとなると悩ましい。
- ・ J ヴィレッジとして、企業研修などを受け入れていく中で、打ち解け合うツールというかコンテンツとして、対話もそうだが体を動かしてお互いに尊敬、リスペクトしあうといったところはアイスブレイクの手段としてとても有効というか効率的であり、すごくいいと思っている。各グループの内容で、体験ものとか食事の最後に BBQ をしたりなど、アクティブ的な要素は打ち解け合うに当たって良いのではないかと考えている。
- ・ 復興や震災とはちょっと離れてしまうが、再来年デフリンピックが J ヴィレッジで開催されるに当たって、CP サッカー（脳性まひ者 7 人制サッカー）の代表の方を体づくり教室みたいな形で学校にお招きして、指導や体験を話していただいている。震災とはちょっとずれてしまうが、多角的にいろいろな話を聞くのもいいかなと思っている。聴覚障害だとデフサッカーになる。今後も手話講座などもやっていく予定なので、そういった方々ともつながりが出て来る。

（2）継続的に関係人口を生み出すようなプログラム終了後の展開に関する意見交換

運営委員会において寄せられた、プログラム終了後にも継続的に関係人口を生み出すような事後展開の在り方について、参加者間で意見交換を行った。

意見交換では、実践の場に参加した学生の所属する大学の学園祭において福島情報を発信するという意見や、楽しさをフックとした旅行コースを作成し、福島に関心を持つ層を広げていくという意見、進学等により福島から出て行った学生・若者が福島に戻ってこないという現状の課題に関して、若者・学生に企業の取組や魅力を知ってもらう取組を進めるという意見など、様々な意見が得られた。得られた意見は事務局において整理し、今後、さらに議論を深めていく。

(主な意見)

- ・学生がいらっしゃるとして、我々福島県にとっては、それぞれが戻った先でそういった活動や福島のことを発信してくれると非常に有難い。例えば学園祭は必ずあるので、そこでブースを出すなど。こちらも手伝いをして福島のものを持っていけるので、自分たちの活動と合わせながら物産を行ったり、パネルなどを置いて情報発信するようなことをやってくれるといいなと思う。そうすると行っていない学生も福島の今を知ることができるし、自分の活動も学内で発表できる。学生であれば、それぞれの学園祭などのイベントを活用してもらうということがパッと思いついたところだ。
- ・福島県が包括連携協定を締結している大学との関係では、職員が講義の機会を設けていただける場合がある。福島の今とか学習の成果を地域学、地域創造的な講義の中で発表できる機会があると面白いと思う。大学のカリキュラムにもよるが。
- ・旅行コースを作成するという事務局資料の記載について、愛ポイントが付いたところを巡るツアーを実施して東京の学生とかに来てもらうような企画をすると、今回考えた内容が活かせるのではないかなと思う。旅行コースを実際に使ってやってみるみたいな実践は、やりやすいかなと思った。
- ・ホープツーリズムでは、基本、教育・学習をテーマとしているので、結構固いテーマになる。そうすると関心を持った人しか来ない。関心を持たない人を呼ぶにはどうしたらいいかという興味のない人に来てもらうには他の楽しさをフックにするしかない。魅力とか楽しさとか、「福島の楽しさを満喫してください」というようなホープツーリズムとは違う切り口で、愛ポイントが付いた方々、場所、風景などを活用することがいいのではないかなと思う。そこに「ふるさと」という要素、前の浜通りの様子なども入れていくと、ホープツーリズムとはまたテーマが違う、福島について過去と今を学べる良いツアーになるのではないかな。
- ・ツアーがらみで、一昨日ぐらいまでやっていた富岡のインターンシッププログラムで出た学生のアイデアなのだが、オンラインで交流するような場を作って、その中から実際に来てもらうというアイデアを発表していた。コロナの間、いくつかの地域でオンラインで地域を案内するツアーがあり、宮城県の丸森町さんがやっていたものに参加した。いろいろ工夫していて、事前にはちみつなどの産物を送ってくれた。それを実際に舐めたりしながらで、参加感のあるツアーだった。コロナの行動制限は解除されたが、東京から福島に来る前にそのような気軽に参加できるもので、愛ポイントが付くとPRして実際に来てもらうことにつなげるとか、そういうものだとやりやすいかなと思う。お金もかからない。
- ・福島県では、特に20代の女性が戻ってこないというのが今の一番の課題だ。それと何かを掛け合わせられないものかなと思う。学生や社会人となって東京に出て、実家には帰ってくるけれどという感じだ。何か帰ってくるきっかけとか、組み合わせることができればいいかもしれない。20代女性が帰ってくるきっかけは関係人口の創出よりも少し概念的には高いかもしれないが。外の方を入れ込むのは当然だが、一旦出て向こうで生活をしている若い方と地元の方の触れ合いの場を作ることも1つ。それがこういうのにマッチすれば面白いかなと思う。
- ・帰ってこない人たちの中には、福島県内にこんなにもいい企業があるということを知らない人がいる。だから若手経営者の方が「こんなにもいい会社だよ」と言う機会があるといい。「どうせ働くと

ころなんてないんじゃない」と言って帰ってこない人が多いので、「こんないいものを作っているし、特殊な技術がある」というようなことが若手に響くと、転職に抵抗がないZ世代などが戻ってきてくれるのではないかなと思う。

- 例えば、福島でふるさと愛を考えるというテーマの下、若手経営者の方に入っただき、浜通り出身の子たちに案内をかけて来てもらって、同じように「ふるさと愛について考えてみよう」みたいなことが成り立つのであれば、この実践の場でやっていることの延長線上で別プログラムとしてできるのかなという気はする。
- 運営委員会の学生も、浜通りの企業の人に会いたがっていた。浜通りで実際に企業をやられていて、すごく熱意のある方や地域貢献に意欲のある方はおられるので、ぜひこの実践の場にお招きして会ったり話したりして、2日目に会社訪問などさせてもらうのはすごくいいと思う。富岡町で先日行ったインターンシッププログラムにおいて、学生に事前と事後でアンケートを取ったところ、福島で働きたいかという問いについて、事前にはそんなにスコアが高くなかったが、終わった後にはスコアが上がっている。福島には仕事がない、あったとしてもいい仕事がないという偏見の部分もあって、知らないだけということがあるので、実際に働ける場はあるし魅力的なんだよということを見せてあげる必要はすごくあると思う。活躍している女性もいるので、実際に会ったりすると、こういうところもいいなと思ってもらえる。
- 福島県からの委託で、浜通りの方の求人の紹介、マッチングをするような事業も存在する。浜通りではロボットやドローンなど、これまで浜通りのイメージにはなかったような企業も求人として結構ある。それを皆さん知らないなので、どういうふうに紹介していくかというところでPRしているという話だった。それと事後の展開がどうなるかは具体的にイメージできないが、地元の人間もよく知らないところもあるので、他地域から来た若者がそれをどのようにもっと深めてくれるのではないかな。地域おこし協力隊なども出ていたが、最大3年で終わるので地元の定着が課題だというところがあり、OB や OG たちとどのように連携していくかが課題になっている。前年度の参加者は運営委員会に入られているようだが、今回の参加者や各年度の参加者がつながっていけるような仕組みがあると、次の展開にバトンを渡していけるのかなと思う。
- (NPO でも自分たちのやっていることがなかなか福島にいる若い子たち、もと福島の子たちに伝わっていない、伝えたいという想いはあるのかという問いに対し、) それはやはりあると思う。あと人材の面もある。NPO の置かれている環境というのもあって、少ない事業費でどうやって運営していくか。現状はその人たちの熱意だけでやっているという部分があるが、待遇などが良くなれば若い人たちも入ってくるのだろうし、そういうリアルなところも兼ねて、一緒にやっていける場所があればいいのかもしれない。
- 事務局資料にある「J ヴィレッジの HP 上に専用ページを作る」という点については、どの程度大きく出せるかはわからないが、やり方としては可能だ。加えて「スマホ等で撮影したものをスケッチブックに記録」とかいうことであれば、パネルみたいな形にして施設内に展示することも可能だと思っている。ベタかもしれないがフォトコンテストみたいな形で、浜通りに来て写真を撮っていたいて、真実の姿というか、そういったところを見て撮っていただけて広がっていただくというような仕組みもあり得るのかなと思う。
- 今回の実践の場だけのふるさと愛の写真等だけではなく、常時受付のような仕組みも考えられるのではないかな。
- 福島の水産業について学ぼうというときに、同じように震災を受けた宮城と岩手を併せて学んで、さらに福島を理解を深めるということがあるとすれば、復興庁は宮城にも岩手にもあるので、しかるべき企業や漁師さんなどの関係者、キーパーソンをご紹介することはできるかなと思う。もう少し広く東北の企業のいろいろなことについては、東北経産局などもあるので、そういうところに対してこちらからお願いしてアレンジしてもらうこともできるかなと思う。福島の現状をより理解す

るためには、他で上手いことやっているところとか、他でも同じように苦しんでいるところとか、いろいろなところを見ながらやるとさらに学べるのかなと思う。

- ・ U・I・J ターンみたいなものも考えられるところなので、今後浜通りで継続ということも1つだし、これを他県に派生させて、それを福島県のPRの場として使っていくという展開も考えられるのではないかなと思った。
- ・ 今回の処理水の問題を見ると国内というよりは国外の問題があるので、せっかくこういうことをやっているのであれば、復興庁のHPの外国語版で「こういうことをやりました」と写真を出すのもいいかなと思う。
- ・ 海外の方にも日本ファンの子はいる。昨日も桜美林大学の中国からの留学生が福島に来てくれて、福島好きですみたいなことを言ってくれた。1人でも2人でも理解者を増やしていくことが重要なので、そういう働きかけは大事だ。
- ・ せっかく運営委員会があるのであれば、万博で何か発信するとしたら何をするのかということや学生の方に聞いてみてもよいのではないかな。

4 閉会

今年度の企画について、2月13日（火）から15日（木）で実施することや運営委員会に関する企画案について合意が得られたため、引き続き運営委員会にて詳細な検討を進めていくこととした。継続的に関係人口を生み出すための事後展開のアイデアも多く挙げられたため、今後の運営委員会・意見交換会での議論に向けて事務局にて整理を行っていくこととした。

第3回の意見交換会は来年2月下旬を予定しており、今後事務的な調整を進めていく。

以上